慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『大越史記捷録総序』注解：導入
Sub Title	Introductory notes on Vietnamese historiography in the late 18th century
Author	嶋尾, 稔(Shimao, Minoru)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.50 (2019. 3) ,p.325- 331
JaLC DOI	10.14991/005.00000050-0325
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000050-0325

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『大越史記捷録総序』注解：導入

嶋　尾　　稔

『大越史記捷録総序』は西山朝期に刊行されたと推測されるダイジェスト版（全32葉）のベトナム通史である。正文は漢文で書かれているが、割注に字喃表記のベトナム語による解説が付されている。刊行年、作者ともに記載されていない。チャン・ヴァン・ザップの研究によれば、旧社会科学図書館に同名の写本が別に二つあり、ひとつは景興17（1756）年に呉時仕（呉時任・呉時徒の父）の弟の呉時燾が撰したもので伝説時代から15世紀初頭の属明期（永楽帝による支配期）までを取り扱っている。いま一つの写本の作者は呉時任の弟の学遜呉時徒であり[i]、それ以降の時代（黎朝期）を記述している［Trần 1972: 13］。チャン・ヴァン・ザップは、伝説時代から黎末までを扱う刊本版の作者を学遜呉時徒と推定するが、呉時徒は黎末の昭統 2 （1788）年に他界している［陳 1986: 1209］ので、あるいは呉家の別の人物が完成版を作成したものかと思われる[ii]。

西山朝は、景盛 5 年（1797）に新たな国史の編纂を史官に命じ、景盛 8（1800）年に『大越史記前編』が刊行されている。陳荊和の考証によれば、同書は呉家家蔵の越史に基づく呉時仕の初稿を西山朝の意向を受けた呉時任、呉時典（呉時任の子）が修訂、補足したものである［陳 1984: 25-32］。この通史は伝説時代から属明期までしか記述していない。それ以降の黎朝期についても西山朝は続編を刊行したが、阮朝期の明命19（1838）年に禁書となり毀却されたとチャン・ヴァン・ザップは推測している。このように18世紀後半に呉家の事業としてベトナム通史が編纂され西山朝成立後これに依拠

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 50 号（2019）pp.325~331

して正史が編まれ刊行されたが、呉家ではその附録として『大越史記捷録総序』が編まれていたということであろう。『大越史記前編』の刊行と同時かそれ以後に『大越史記捷録総序』も刊行されたと考えておきたい。

チャン・ヴァン・ザップによれば、同氏が検討したベトナム社会科学図書館旧蔵（現、漢喃研究所所蔵）のA.1180本には2葉欠落がある［Trần 1972: 13］。また、ベトナム国家図書館所蔵刊本（R.2254）をウェッブサイト（KHO TÀNG THƯ TỊCH HÁN NÔM http://hannom.nlv.gov.vn/）で見ることが出来るが、破れが目立ちあまり状態のよい本ではない。これに対して、慶應義塾大学斯道文庫所蔵エミール・ガスパルドヌ旧蔵書（ガスパルドヌ文庫）に含まれる刊本（Gベトナム -063-1）は欠落も破れも無く比較的状態のよい本である。この本を見ると、表紙には手書きで「國史捷録解音総序」とある。これは版心書名を取ったものである。内題（首題）は「大越史記捷録総序」であり、従来の研究もこの書名でこの著述を呼んでいるので、本稿もそれに倣いたい。なお、この刊本には全ページに渡って欄外に朱で誰かのコメントが記されている。これも考察の対象となろう。

次号以降、数回に分けて本テクストの注解を行うことにしたいと考えているが、そもそもこの著述の注解を行うことに如何なる意味があるのか。まず、この著述はベトナム史のアウトラインを描き歴史全体の捉え方を提示しており作者（たち）の歴史認識の特徴を把握しやすい。同様の性格を持つ歴史記述として『大越史記全書』の巻首に置かれた黎嵩の「越鑑通考総論」（洪順6［1514］）があるが、両者の比較により歴史観の変化を明瞭に追うことが出来る。第二に、この本は漢文による記述と字喃表記ベトナム語の記述を併記している稀有の歴史書であり、両者の記述を比較することで、漢文による歴史理解とベトナム語による歴史理解の差異を知ることが出来るという点で貴重である。第三に、1800年頃に刊行されたと推測されるこの本は、19世紀に出版される様々なタイプのベトナム通史の出発点となるものであり、このテクストの歴史認識を19世紀の通史認識の通時的展開を整理するための参照基準として利用することが出来る。

上記の第二の論点に関わることであるが、ベトナムの歴史認識と中国の歴

史認識の関係についても、このテクストは考察の手がかりを与えてくれる。次号以降では、時代順にテクストを区切って注解を行う予定であるので、ここでは全体に関わる歴史の基本概念で中国の歴史認識と関連の深いものについて簡単に考察を加えておくことにしたい。

10世紀に入りベトナムは中華帝国から離脱し自立勢力が各地に台頭する。一旦、呉権により統合の機運が高まるが、結局十二使君の抗争状態に陥る。968年（或いは966年）、丁部領がこれを統合して皇帝を名乗り国号を建てる。このベトナム史上の一大変化についてこのテクストは次のようにまとめている（6b-7ab）。

> 計内属紀、歴劉漢・曹魏・馬晋・楊隋・李唐・朱梁・石晋・南漢・柴周、幾千餘年、泯泯紛紛、孰能統攝。
> 至紛争紀、有昌熾・公罕・日慶・景碩・李圭・守捷・呂唐・阮超・陳覧、凡十二使[iii]、膠膠擾擾、誰是綱維。
> 天道豈有分而不合乱而不定耶。
> 先皇丁氏・・・・・・既而乗時挙事、伏義取残、削平十二使君、奄有一統天下、建都開國、制度一新。（傍線筆者）

ここでは中華帝国の支配下にあった時期を内属紀と呼び、十二使君抗争の時期を紛争紀と呼んでいる。内属紀には、南越を征服した漢以降、五代の後周まで諸王朝が入れ替わりベトナムの地を統治したが、何れもベトナムを〈統摂〉出来なかった。また、紛争紀には十二の地方勢力が割拠して誰もベトナムに〈綱維〉をもたらすことができなかった。丁氏が登場しようやく〈天道〉により十二使君を平定し〈一統〉の天下を領有したとしている。

この箇所の前半部分に付された二つの割註にはベトナム語で次のような記述がなされている。

> 計自内属㢸閉饒茛乗酐解拯埃哈統攝特
> Kể từ nội thuộc trải bấy nhiêu đời thừa nghìn năm chẳng ai hay thống nhiếp được

（内属以来、何代にも渡って千年以上も誰も〈統摂〉できなかった）

典芃紛争・・・・・・拯黜<u>絅綯</u>芾

Đến đời phấn tranh …… chẳng ra giềng mối nào.

（紛争に時代になり、・・・・・如何なる〈絅綯 giềng mối〉も出現しなかった）

漢文の〈統摂〉はベトナム語でも同じ語が使われている。〈綱維〉は〈絅綯 giềng mối〉と訳されている。ごく基本的なことを確認しておくと、漢文において、「統」は、「いとぐち」「糸すじが端から全体にゆき渡ること」あるいは「集糸の集まるところ」「万物みな一に帰する（こと）」を意味する［藤堂ほか 2018；白川 2007：672］。本来糸に関わる語であり、端緒から全体に広がる、或いは、多数が一に帰するイメージのようである。「綱」「維」はともに「つな」を意味し、「綱維」は「太い綱でつなぎとめること」である［白川 2007：23,323；藤堂ほか 2018］。一方、ベトナム語の「絅 giềng」は「太く丈夫な綱」であり［Nguyễn 2014: 687］、「綯 mối」は「糸の端」「接続する糸、線」「先端、源、先端の出会うところ」である［Pigneau 1999: 297; Hội Khai trí Tiến đức 1931:348; Nguyễn 2014: 1149; Huình 1896; 45］。「絅綯 giềng mối」は転義として「秩序のあること」を表す［Hội Khai trí Tiến đức 1931; 220, 224］。「絅 giềng」が「綱」に、「綯 mối」が「統」に対応していることは明らかである[iv]。

逆に19世紀末のフイン・ティン・クアのベトナム語辞典は、漢語由来の語として「統 thống」を採録し「mối, giềng, 一つの mối にまとめる」という語釈を示している。さらに「一統 nhứt thống」について、「一つの mối に導く、まとめて共通の主となる」という説明をしている［Huình 1896; 412］。「絅 giềng」「綯 mối」「統 thống」が同様の意味を表す語として理解されていたと見られる。

11世紀に成立した李朝はベトナム初の長期王朝となり、13世紀にそれに代わった陳朝が元寇をしのぎ独立を維持することに成功した。その動きについて、このテクストは次のように評している（22b-23a）。

丁皇一統、足見英雄。李氏八傳、亦為長久、君德則垂裕後昆、李祖鑒大行似厚。國勢則掃清巨寇、陳家視丁李差強。

〈一統〉の世を治めた丁先皇は英雄と見なすことが出来るとした上で、八代続く李朝を建てた李太祖の君德は子孫に偉業を残したという点で彼に先行する黎大行皇帝より厚く、元寇を一掃した陳朝の国勢は丁朝・李朝より強いと評価している。李朝についてベトナム語で次の評価が併記されている。

論君德時希李祖撿緈ˇ朱昆召搦貝希黎大行群譚欣

Luận quân đức thì vua Lý tổ rủ mối cho con cháu so với Lê Đại Hành còn dày hơn.

（君德を論じるなら、李太祖王は子孫に mối を垂らしたので黎大行より德が厚い）

漢文の「垂裕後昆（豊かさを後世の子孫に残す）」（『書経』「仲虺之誥」を引用）を「子孫に mối を垂らした」と訳している。上で見た「緈 mối」が空間的な統一を含意していたのに対して、ここでの「緈 mối」は時間的なつながりを表しており、系統、伝統、正統など「統」に対応していると言えよう。

「緈 mối」がベトナムの歴史認識の鍵概念の一つであることは間違いあるまい。それは歴史の中での空間的な統合と統合された政体の時間的な継承の両者を含意する。中島隆博は中国の歴史認識が〈統〉への欲望に縛られていることを指摘した［中島 2015］。ベトナムの歴史認識も明らかにその影響下にある。両者の丁寧な比較は今後の課題としたい。

文献

Hội Khai trí Tiến đức. 1931. *VIỆT NAM TỰ ĐIỂN*. Hanoi: Imprimerie Trung-Bac Tân-Van.

Huình Tịnh Của.1896. *ĐẠI NAM QUẤC ÂM TỰ VỊ*. tome2. Saigon:Imprimerie Rey, Curiol &

Cie
Nguyễn Quang Hồng. 2014. *TỰ ĐIỂN CHỮ NÔM DẪN GIẢI*. Hà Nội: Nhà Xuất bản Khoa học Xã hội.
Pigneau de Béhaine (Hồng Nhuệ & Nguyễn Khắc Xuyên tr.). 1999. *TỰ VỊ ANNAM LATIN*: Ditionarium Anamitico Latinum 1772-1773. TP.HCM:Nhà Xuất bản Trẻ.
Trần Văn Giáp. 1972. ”*ĐẠI VIỆT SỬ KÝ TIỆP LỤC TỔNG TỰ* Một quyển Việt sử tóm tắt dịch nôm và khắc in dưới triều Tây-Sơn.” *Nghiên cứu Lịch sử* 63.

嶋尾稔. 2001.「タイソン朝の成立」『岩波講座　東南アジア史4　東南アジア近世国家群の展開』東京：岩波書店.
白川静. 2007.『新訂　字統（普及版）』東京：平凡社.
陳荊和. 1984.『校合本　大越史記全書　（上）』東京：東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター.
陳荊和. 1986.『校合本　大越史記全書　（下）』東京：東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター.
藤堂明保・松本昭・竹田晃・加納喜光. 2018.『漢字源　改訂第五版（キンドル版）』東京：学研プラス.
中島隆博. 2015.「「統」への欲望を断ち切るために：中国史の書き方と読み方」濱下武志・平勢隆郎編『中国の歴史：東アジアの周縁から考える』東京：有斐閣.

注

i 18世紀後半のベトナム政治史を描いた歴史小説に『皇黎一統志』（『安南一統志』）があるが、これは呉時任の編になるものであり、全十七回のうち最初の七回を呉時徒が執筆している。この作品の主題は「一統」である［嶋尾 2001: 298-299］が、後に述べるように『大越史記捷録総序』においてもそれは強く意識されている。

ii チャン・ヴァン・ザップは学遜を Ngô Thì Trí（呉時任、呉時徒の弟）としているが、Ngô Thí Chí（呉時徒）の誤りである。学遜のテクストに1789年以降の年号が記されているとのことであるが、まさに呉家の誰かが学遜のテクストを書き継ごうとしたということであろう。

iii 十二使君のうち 9 人しか挙げていない。理由は不明である。

iv 18世紀末のピニョー・ド・ベーヌのベトナム語―ラテン語辞典は、「giềng」単独の意味を載せていないが、「giềng mối」には「規律」、「giềng lưới」には「網の主要な綱」（lưới は単独で網の意）という語義を載せている［Pigneau 1999: 174-175］。漢字の

「綱」の本来の意味は「网（あみ）の紘（おおづな）」なので［白川 2007：323］、「giềng」と「綱」の類似性は明らかであろう。

v 字喃辞書を見ると「撿緶孕緹衛黏 rủ mối dựng giềng về sau」（後世のために mối を垂らし giềng を建てる）という類似の表現がほかにも見られる［Nguyễn 2014: 1149］。